



TITLE:

# <活動報告>不登校支援としての適 応指導教室の意義と課題：その意義 について

AUTHOR(S):

稲毛, 知愛美; 本迫, 美紀; 岩井, 祥子; 菅, 佐和子

---

CITATION:

稲毛, 知愛美 ...[et al]. <活動報告>不登校支援としての適応指導教室の意義と課題：その意義について. 京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻紀要：健康科学：health science 2014, 9: 79-81

ISSUE DATE:

2014-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/185385>

RIGHT:

■活動報告

## 不登校支援としての適応指導教室の意義と課題 ——その意義について

稲毛知愛美<sup>1)</sup>, 本迫 美紀<sup>2)</sup>, 岩井 祥子<sup>3)</sup>, 菅 佐和子<sup>4)</sup>

The meaning and the subject in an adaptation class as truancy support  
——about the meaning

Inamo chiami<sup>1)</sup>, Honsako miki<sup>2)</sup>, Iwai syoko<sup>3)</sup>, Suga sawako<sup>4)</sup>

### 序 論

#### 1. 研究背景

文部科学省によると平成22年度の全国の国公私立の小・中学校の不登校児童生徒数は約12万人と相当数に上っている。こうした不登校児童生徒数の増加をうけて、文部科学省は1990年度に不登校問題への新たな取り組みを始め、1990年度には全国でわずか84施設であった適応指導教室が現在では全国に1200施設以上も設置されている。

適応指導教室では児童生徒の在籍校と連携を取りつつ、個別カウンセリング、集団での指導、教科指導等が行われ、学校復帰を支援している。

しかし尾形らによると、調査を行った全適応指導教室が、その目的を学校復帰は実現しなくとも、個々の問題の解決の援助であると考えていることが示されている<sup>1)</sup>。つまり適応指導教室は生徒が力を身につけて、それぞれの問題を解決していくことを重要視しているのである。そして植村・岸澤らは、適応指導教室に通うことで生徒たちに「行動の拡大」「対人関係の拡大」「精神面の向上」がもたらされたと述べている<sup>2)</sup>。不登校児童生徒にとって、このような適応指導教室の果たす役割は大きく、今後も不登校支援の中核的施設として拡大していくことが望まれる。

#### 2. 研究目的

適応指導教室で実際に不登校児童生徒と関わっている心理スタッフへのインタビューを通じて、児童生徒の適応指導教室に通い始めた直後と、通い始めて数か月から半年が経過した時点での対人関係における変化や心情の変化、不登校支援における適応指導教室の役割を知り、現状を明らかにしていくことを目的とす

る。本研究では適応指導教室の意義について考察する。

### 方 法

京都府内の適応指導教室でボランティアとして半年～6年間活動している・または過去に活動していた経験のある心理スタッフ、男女計7名に対して2012年8月中旬～10月上旬にかけて半構造化面接を行った。

倫理的配慮については、調査対象者にあらかじめ調査目的を説明し、了解を得た上で調査に参加してもらった。調査を行うにあたり、面接で使用したレコーダーの記録は、本研究のみに使用し、研究者以外に聞かせることのないこと、また個人を特定できるような分析を行わないことを文書および口頭で説明した。

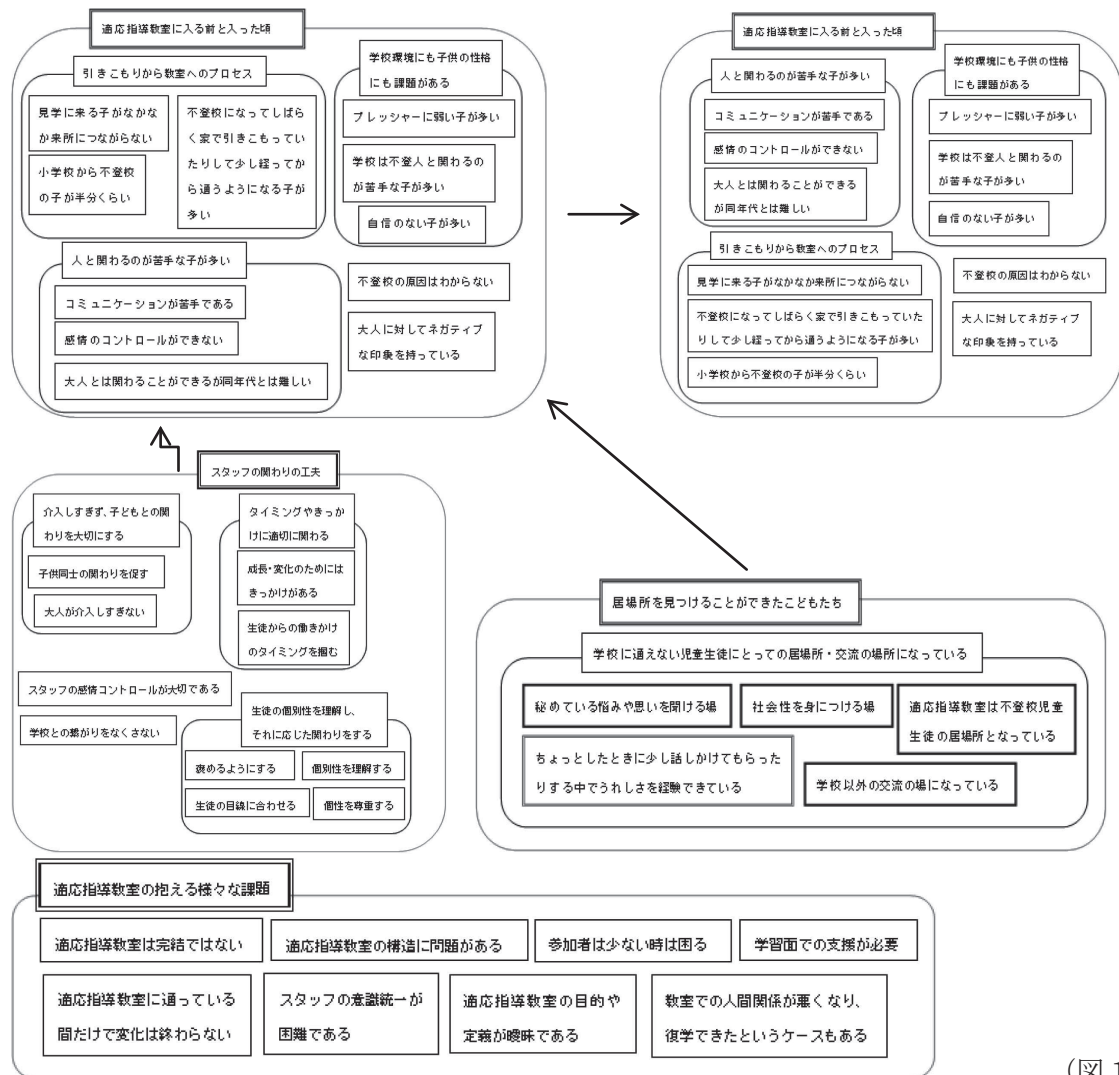
### 結果および考察

7名の適応指導教室のスタッフへのインタビューを行い、その内容から行動の拡大、対人関係の拡大、適応指導教室の課題などについての発言を抽出した結果、よく似た意見が多く見られた。それらをKJ法により分析した。その結果16のサブカテゴリーが、さらにそこから5のカテゴリーが抽出された。これらをもとに図解化を行った。以下にそれらを示す(図1)。

図1をもとに文章化を行い、これらより明らかになった事象を適応指導教室に通う児童生徒の変化について着目して考察していくこととする。

適応指導教室に通う児童生徒の特徴として、コミュニケーションが苦手であるといった意見があった。中でも大人とは関わることができるが同年代とは難しいという話がいくつも挙げられた。

この意見に関連して先行研究においても渡辺・蒲田らは、不登校生徒は社会的スキルが登校している生徒よりも有意に低いことを実証している<sup>3)</sup>。このように社会的スキルが低いために、人と関わることに困難を感じているということが不登校につながっているのではないかと考えることができる。しかし一方で、不登



(図 1)

校になる児童生徒のタイプとして最近では周りの空気が読めなくて教室でトラブルを起こしてしまう子が不登校になる傾向にあるという意見や、不登校の原因は本人もわかっていないことが多いという意見もあり、様々な問題が複雑に絡み合っているのではないかと考えられる。

学校は不登校児童生徒にとってはしんどい場所であるという話が多く聞かれた一方でプレッシャーに弱い子や自信のない子が多いという意見から子どもの性格にも課題があることが明らかになった。学校はクラスの人数が多く気を使ったり、勉強時間が長くて疲れたり、精神的・体力的にきついところであるといえるであろう。

学校は同年代との交流の場、社会性を身につける場として重要な役割を担っているが、不登校児童生徒は学校に通うことができないために、そのような場を失ってしまっており、適応指導教室に通うことによって補っていると考えられる。様々な要因から不登校児童生徒が出てくることは避けられないので、そのよう

な子どもたちを受け入れる場所として適応指導教室は重要であると考えられる。

最初は周りをうかがっている子が多いがみんなが活動的になっていくなど、適応指導教室に通ううちに少しずつ活動性が高まっていくという意見が多く見られた。

児童生徒の変容について谷井は適応指導教室に通うことで児童生徒の社会性が高まるという結果を示している<sup>4)</sup>。これは安心して自然体で過ごすことができるようになったために、もたらされたものではないかと考えられる。また、児童生徒の多くが人と関わりたいという気持ちを持っているという意見があり、その気持ちに気づいて適切に援助することで子どもたちは積極的に自分自身を変えようとして、対人関係の拡大や行動の拡大に繋がるのではないかと。

## 結 論

不登校児童生徒の抱える問題は、社会的スキルの問題やその子どもの個性に関する問題などさまざまであ

る。適応指導教室に通ううちに子どもたちは安心して自然体で過ごすことができるようになる。そして少しずつ活動的になり、同年代の集団の中でも自然にふるまえるようになる。適応指導教室は不登校児童生徒の自主性・自立性を育てたり、自信を回復させたり、対人関係の能力を伸ばしていることが示され、学校とは違う環境で安心できる居場所を提供し、援助していくという不登校支援の重要な役割を果たしていることが明らかになったといえよう。

## 引用文献

- 1) 尾形早織, 青木真理: 適応指導教室の現状と展望. 福島大学教育実践研究紀要, 2000; 38: 93-101
- 2) 植村勝彦, 岸澤正樹: 適応指導教室が不登校生徒に対してもつ機能の現状と期待. 愛知淑徳大学論集 コミュニケーション学部・コミュニケーション研究科篇, 2008; 8: 109-124
- 3) 渡辺弥生・蒲田いずみ: 中学生におけるソーシャルサポートとソーシャルスキル～登校児と不登校児の比較～. 静岡大学教育学部研究報告(人文・社会科学篇), 1999; 49: 337-351
- 4) 谷井淳一: 地域での不登校に対する支援の現状と適応指導教室. 社会教育, 2002; 57(10): 54-57